瀬戸内晴美作品集〇5〇

田村俊子

他

筑摩書房

瀬戸内晴美作品集　第五巻

昭和四十七年四月十五日　第一刷発行
昭和四十七年六月十五日　第二刷発行

著者　瀬戸内晴美

発行者　井上達三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京(二九二)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三
郵便番号　一〇一―九一

印刷　明和印刷・製本　矢嶋製本

(分類) 1393 (製品) 72605 (出版社) 4604

目次

田村俊子　三
いろ　二四九
ざくろ　二六五
女子大生・曲愛玲　二八一
聖衣　二九五
花芯　三一三

解説　秋山駿　三一七

田村俊子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東慶寺

朝から雨もようであった。

東京駅から私は横須賀線に乗った。北鎌倉の東慶寺へ行くために。

徳川の長い封建制度のしがらみの中で、非力で悲運な女たちが、唯一の避難所としていたというこの「駆け込み寺」に、前々から私は興味を強く惹かれるものを持っていた。けれども、今日はじめてその寺を訪れる目的は、別であった。

故田村俊子の歿後十四回目の法要が、東慶寺で午後一時から行なわれる。私は友人の平田敏子と、はじめて俊子忌に参列するための途次であった。

私は生前の田村俊子に一面識もない。そのあまり多くない作品も、全部読んでいるとはいえない。その上、私の目にふれた十指に足りない作品の中でさえ、文学的感銘を心の底からゆさぶられたのは、数えるほどしかなかった。それでいて、私は、いつのころからだろうか、田村俊子という一人の人間が、生きて、書いて、愛欲の惑いにもだえて、ついには、上海の北四川路の路上に、行き倒れて孤独な生を終った一生に、強く惹かれはじめていた。その作品の中に、繰返し、ひたむきに（あまりにひたむきなため、時には愚直な感じの押しつけがましさを読者に感じさせるほど）叫んでいる、目覚めた女の「自我」と、卑俗な現実の矛盾相剋の嘆きにうたれた。

私はたしか十二、三歳の頃、改造社版の現代日本文学全集で、彼女の作品をはじめて読んでいた筈である。けれどもそのどれも、単純な少女の頭には後にのこるような感銘を与えられなかった。ただ、記憶のどこかに、「炮烙（ほうらく）の刑」という何か激しいもののほとばしる題名だけが、ぼんやりとひっかかっていた。同じ巻に同時に収録されていた野上弥生子、中条百合子の名前は覚えて、田村俊子の名を完全に忘れ去った。少女の私には、他の二人の美しい華やかな感じのする名前に比べ、田村俊子という固有名詞は、あまりに平凡な魅力のない名前でしかなかった。

そのようにして十年近くもすぎ、私は思いがけない土地で、思いがけない情態の下に田村俊子の名前を聞いた。

昭和十八年の秋、私は結婚し、北京へ渡っていた。

そこで、夫の最も親しい女友達として、田村ふさという人を紹介された。

並の日本の男たちよりも背の高い田村ふささんは今でいう八頭身スタイルで、地味な色合だけれど、いつも贅をつ

くした地質の中国服を、粋に着こなしていた。銀座通りにたとえられる北京の王府井（ワンフーチン）の石畳を歩いていても、通行人の人目をひくような個性的な匂いを身辺に漂わせていた。

私の夫や、その仲間と同じく、外務省の留学生として渡燕し、その期間がすぎても、北京に居残り、師範大学に奉職している経歴であった。彼等の中で唯一の女性である田村ふささん一人が教授の肩書を持っていた。他の仲間は、平講師か、せいぜい助教授である。当時の彼女は、三十を一つか二つ越したばかりの年齢であった。

中国語は、留学生の誰よりも巧く、劉という女子学生を家にひきとって同棲していた。暮し方も、完全な中国式で、三度の食事から、便所の様式まで、純中国風に徹底していた。

馥郁とした女らしさには凡そ縁遠かったけれど、彫の深い小麦色のきりっとした顔だちには、少女歌劇の男役に感じるようなある種の色気があり、美しかった。学生達の間でも好かれているふうであった。

そのふささんが、どういう話のきっかけからか、私に、

「佐藤俊子のもの読んだ？」

と、きいた。

私がぼんやりとした顔をしていると、

「田村俊子で出てるわよ。田村ってのは、別れた亭主の名で、本当は佐藤なのよ。この部屋へも、たしかつれて来たことがあるわ」

と、つづけた。

私たちの巣は、王府井から横に入った三条胡同の入口に近い紅楼飯店の一室だったので、よく夫の友人たちのたまり場になっていた。ふささんのその話より、つい二、三日前、夫から、やはり私たちのその部屋に、嘘か本当か、李香蘭が遊びに来たことがあるなど、聞かされて、ど肝をぬかれた矢先であったため、私は別段、佐藤俊子＝田村俊子が、かつて私どもの部屋に立寄ったと聞いても驚かなかった。夫は天性の社交好きであって、いわゆる北京では顔の広い人間ということを自他ともに認めているのであったから。

それを機会に、ふささんは、何かにつけて、しきりに私に、田村俊子について語ってきかせた。姓が同じ点で血縁関係でもあるのかと思ったが、全然他人だという。ただ、田村ふささんは、内地にいた頃、長谷川時雨の「女人芸術」に入っていて、その最年少者として、同人から可愛がられた経歴の持主であった。一生に一つだけ小説が書きたい、その題も決っているの、「青い花」というのなど、目を輝かし、照れもしないで、十歳あまりも年若な私に語ってきかせる文学少女上りであった。そのため、日本語で、

日本の文学についてしゃべれる恰好な相手が出来たと、私を可愛がってくれたのではないかと思う。

ふささんの住む支那家屋で、厚いアルバムを見せてもらったことがあったが、その時も、目を輝かして、「女人芸術」の人達の集まりの写真を幾葉か示してくれた。

「これが長谷川春子。この美人が、大田洋子」

いちいち長い指先でさし示しながら、彼女は楽しそうに語った。どこかで、芝居をした写真だといって、メーキャップの舞台姿の同人の写真も見せた。その中で、ふささんは男ズボンをはき、頭にハンティングをかぶり、男装していた。宝塚の生徒のような感じで、それがひどく似合っていた。

「これが、佐藤俊子よ」

ふささんが、アルバムの隅の小さな写真を指さした。支那服のふささんと並び、スタイルのいい支那服の女が一人立っていた。年の頃はわからなかったが、きれいな人だと思った。

「これでもう六十に近いんだから、若いでしょ」

そう聞けば、本当に若々しい。小さい写真のせいか、支那服の似合うせいか、四十代とも三十代ともとれた。

「いい人よ。面白い人なの」

ふささんの瞳はまた、いきいきと輝いて来た。

その頃では、私はもう、ふささんの独特の語り口に馴れていた。ふささんは、人間を批評する時、いい人とイヤナヤツの二種にきっかりと分類してしまう。イヤナヤツのことをしゃべる時は、心の底からいやそうに、その表情まで、どす黒く曇らしてしゃべる。彼女がいい人と称する人物の話をする時は、とたんに瞳がいきいきと輝き、人なつこい甘い表情が、どこか男っぽい顔付の中にあふれるのであった。特に佐藤俊子に関する話の時は、彼女の表情がいちばん柔かく和むのに気がついた。

彼女の私に語る佐藤俊子は、北京へ渡って以来、六国飯店や北京飯店などの一流ホテルで、豪華な生活を送っていた。そして、そんな一流ホテルでの生活が、実にぴったりとふさわしい人柄のようであった。

六国飯店の豪華で清潔なベッドに寝ころびながら、佐藤俊子は、いつでも機嫌よく、自分を心から崇拝している子供のように年下の三十女を迎える。

「いい子だね、ここへおいで、可愛がってあげるから……ね、キスしてあげよう、おいで」

または、

「鈴木悦はいい男だよ。やっぱりあんないい男はちょっと見つからないな」

など、ひとり言のようにいう。

鈴木悦とは、俊子が夫の田村松魚と別れて、大正七年（一九一八）十月十一日に、後を追ってアメリカへ渡ったほどの熱烈な恋の相手であった。

田村俊子はそれ以来十八年間、バンクーバーに滞在した。悦は先に一人帰国し病歿している。俊子は、この宿命的な恋の相手の死目にもあっていなかった。

「鈴木悦には今でも惚れてるらしいわよ。悦の話をしだすと、手放しなの」

ふささんはそういって、田村俊子から聞かされた鈴木悦なる人物のイメージを、私に聞いたとおり伝えてくれるのである。それによれば、鈴木悦は、スタイルがよくてハンサムで、頭がよくて女に優しく、女を悦ばす術にたけているという、申し分のない男性像が出来上る。女から、死んだ後までもこれほど慕われる鈴木悦は、男冥利につきる男ではないだろうかなど、妻とは名ばかりで、まだ書生くさく、男女間の情さえ、しかとは解していない二十歳の私は、想像したりするのだった。

「佐藤俊子は今は上海で『女声』って雑誌やってるのよ。左俊芝という中国名を使ってる。北京でやりたがって、私やあんたの御主人といろいろ相談したんだけど、北京じゃだめだったの。そのうちまた彼女きっと北京へ遊びに来るわ。今度来たら、きっとあなたにも逢わせてあげるわね」

ふささんは、いつのまにか、私も彼女同様俊子の熱烈な崇拝者の一人に決めこんでしまい、こんなことを何度もいった。

ところが、田村俊子が再び北京を訪れないうちに、昭和二十年八月の終戦を迎えてしまった。

終戦前の二、三か月は、私の身の上にも、夫の出征など変化があり、あれほど親しくしていた田村ふささんとの往来も、なぜかとだえた。

その間、昭和二十年四月十六日に、佐藤俊子の左俊芝は、上海の路上に脳溢血で倒れ、永眠していたのであった。終戦の声も聞かずに。

田村ふささんがその報を知らなかった筈はないと思う。けれども、終戦後、大混乱の北京で、何か月ぶりかでめぐりあったふささんの口からは、ふっつりと、佐藤俊子の話題は出なかった。

その時ふささんは、青いベレーをかぶったみるからに精力的な青年とつれだっており、松本というその人を、私たちに夫だと紹介した。

松本夫妻は、その後間もなく「日本自由党」という結社を結成し、頭目となった。終戦後、無警察状態の下におかれた北京在留邦人の中では、日本自由党の実力保護をうけた者が多かったし、その女頭目としての颯爽たるふささん

の活躍ぶりが、記憶に残っている筈である。が、これは田村俊子という私の主題には無縁のことなのではぶく。

私が終戦後、何年かたって、再び田村俊子の名を思いだしたのは、夫と離婚し、まったく自分でも思いがけなく、ペン一本に頼って女一人の生活を支えはじめた頃からであった。

この頃になって私ははじめて、じぶんがじぶんとして生きているという実感にとらえられた。これまで使ったことも、あまり聞いたこともない自我ということばが、時代の流行とは別に、抽象論ではなく、じぶんじしんの感覚として内的に実感されてきていた。と、同時に、明治以後の日本の女の生き方が、あらためて違った角度から、私の目に映って来た。

私のまわりでは、これまでひしひしと私を取りまいていたあらゆる権威が威厳を失い、不様に崩壊した。私じしん、家庭や家族の絆さえ断ちきっていた。家と、過去の社会的立場を捨ててしまった私は、ただ、じぶんじしんの感覚的実感と事実に頼って、物事を判断し、行動するだけであった。そのくせ、私はじぶんの行動の一つ一つに抵抗を感じ、こだわらずにはいられなかった。そんな私に、はじめて、田村俊子の小説が、ひどく身近に心に触れてきた。

「由目と独立と自己」を声高に主張しながら、実生活の中には、前近代的な儒教的修養精神や、封建性の伝統にとりかこまれていた、明治と大正のはじめにあって、じぶんを「目覚めた女」と自覚した田村俊子が新しい近代主義の思想に立って、しゃにむにじぶんをとりまく旧さを、じぶんの中の女に向って細い腕をふりあげている姿が、悲痛さといじらしさと一種のこっけいさをもって、私には身近に感じられた。理論的には「新しい女」としてじぶんをきずきあげていた田村俊子の闘わねばならない敵は、あいかわらず旧態依然の頑固さで、彼女たちを圧迫している社会や、家庭や、その夫ではなく、彼女じしんの中に住む、旧い女の愛欲と情緒であった。同時代の男の作家たちが、近代主義精神や個人主義の思想にたって、現実の旧さとの矛盾に悩み、苦しみ闘っている苦闘とは、ニュアンスの違いがあった。

田村俊子の文学上の行きづまりも、生活的破綻も、彼女が、この闘いに気力と才能がつづかず、無惨に破れたところに由来するのではないだろうか。樋口一葉ほどの天才に恵まれず、宮本百合子ほどの思想性もなかった田村俊子の文学は、天性恵まれていた感覚が磨ぎすまされ、絢爛として独自の官能の世界を描きあげていった。その花は色薄く、花弁は小さくかじかんではいたけれど、一葉や百合子が咲かせてみせた大輪の花にはない、官能的な蠱惑的な強烈な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

匂いを放って、花茎は悪びれず天を指していた。

低く垂れこめた雨雲の下に新緑の鮮かさが燃え上るようであった。

電車は森閑とした北鎌倉についた。

駅前の売店で教えられたまま、広いバス道路を百米ほど進むと、道路の右側に東慶寺の石段があった。私たちの数米前を歩いていた二人連れの男女の背も、その石段を上っていく。今日の法要の参列者なのだろう。

東慶寺は、いかにも尼寺らしい小ぢんまりとしたたたずまいで、親しみ深い建物の表情であった。

既に参列者は大方揃っており、数人の人々が、机をかこんでもの静かに坐っていた。

今日の忌の施主である湯浅芳子氏と山原鶴氏が何かと世話を焼いておられた。私は偶然の機会から、一か月ほど前、山原先生に茶道の入門を許された機縁で、今日の俊子忌にも参列を許されたのであった。

「俊子会」の事務所は、はじめ岡田八千代邸にあったのが、山原家に移されていることもその時知った。作家では立野信之氏の顔が見えた。間もなく、佐多稲子氏が見えた。故人の生前親しかったらしい人や、故人の文学のファンらしい人々、男女こめて全員十一名の参列者であった。

本堂で短い法要の時がすぎるころ、ついに雨が降りはじめた。緑に光ってみえる四月の細い雨は、寺の縁の下から花茎をのばした満開の牡丹のたわわな花弁の上に、音もなく降りしきった。

雨脚は次第に激しさをます。一同は庫裏に帰り、円覚寺から取りよせた弁当を開いた。

席上、草野心平氏から不参加をわびる電文がとどいた。

「……アナタノオコルカオガメニウカブユルセ……」

湯浅芳子氏が、読みあげ、二日酔だろうと磊落な笑い声をたてた。

俊子って人は、本当にしようのない人だったけれど、憎めない人だった。さんざん借金されたり、迷惑をかけられたりした人たちでもやっぱり俊子をなつかしがっているし、愛している、あれは人徳というものだろうかと、湯浅氏が語った。そのつくろわない声の中にも、故人を今も愛惜してやまない愛情が、あたたかくこもっていた。

誰も、とりたてて田村俊子について語る人もなかった。ましてやその文学についてなど。

ただ、こうして雨の日の法要に寄り集り、言葉少なに坐っているだけで、心の和む雰囲気であった。

田村俊子の印税が五十万円ばかりあり、その寄贈場所も決らないという話が出たが、誰の意見も出るわけではなか

った。

雨は一向にやみそうもなかった。

雨をついて墓参をすることになる。

庫裏を出る時、山原先生に教えられて鴨居を仰ぐと、夏目漱石から、田村俊子にあてた美しい毛筆の手紙が横額に入れられてあった。

不一玉稿十七の娘只今頂だい致しました御暑い所をお急き立てまして済みません稿料は二三日中に社から届けさせる事に取計ひます一回四円の御払になつて居りますからどうぞ其御積りで御了承下さいましそれから掲載の順序はどうぞ私に御任せを願ひたいと思ひます

其は読者のこと作家のため私の方で好きやうに御取計ひたいのですから

先は右御礼かた〳〵御挨拶まで

夏目金之助

田村俊子様

と、読めた。

墓は、東慶寺の裏山にある墓地の入口に近く、立っていた。

右隣に、山原先生の墓標に定められた白い観音像が、柔和な姿でよりそっている。

真向いに、真杉静枝氏の墓石が立っていた。同じ台地の向って斜め右に、佐佐木ふさ氏の墓標があった。

明治から、大正、昭和へかけて生きた三人の女流文学者、田村俊子の言葉をかりれば「女作者」の墓石がそこにそうして、ひっそりと向い立ち、緑の雨に濡れ清められているのが、深い感慨を呼ぶ。

三人の中で、誰の文学が高いとか大きいとか、誰の生涯が、女として幸福だったろうかと、問う気持はおこらない。

私は三つの墓石を同じ手厚さで洗い、同じ心の深さで掌を合わせた。

黒いスーツと帽子に身をつつんだ小柄な中年の婦人が、田村俊子の墓石に水をそそぎながら、

「おなつかしいわね、鳥の子さん」

と、口の中でつぶやくのを私は聞いた。ふりむいた婦人は、私に聞かれたらしいとはにかんだ微笑をうかべ、問わず語りにいった。

「俊子さんはね、バンクーバーで、鳥の子夫人といわれていたんですよ。鈴木さんの主宰する新聞に、鳥の子というペンネームで、随筆なんか書いていられましてね。ある時、何かのパーティで、私どもが、いったいあの鳥の子って人は誰だろうと話しあっていたら、俊子さんが、くつくつ笑

いだして、あれは私よとおっしゃいましてね。それからみんなであの方のことを鳥の子夫人とか、鳥の子さんとかよんでいました。とてもやさしいあったかい方でしたわ……華やかなようでいて淋しい……」

雨はさらにやみそうになく、私たちの頭上にも、三つの墓石の上にもあいかわらず降りしきっていた。

鶴

松寿庵は雑司ケ谷鬼子母神の近くにある。

簡素な茶庭には打水がうたれ、燈籠の灯が、瑞々しい青苔の緑の色を、たそがれの中にしっとりと浮き上らせていた。座敷の灯も行燈型のスタンドに移されている。主人の山原鶴女の、抜けるように白い俤と、シングルカットにすっきり刈りこまれた銀髪が、ぼうっと光を放つような感じがする。

扇風機とか殺虫剤は一切使わないので、細く白い蚊やり香の煙が、うちわのゆるい動きにつれ、ゆらゆらとたゆたっていく。

白地と紺のくっきりした浴衣に濃紫の博多帯をしめ、庭のほうに目をやりながら、もう二時間の余も田村俊子の思い出話を語ってくれている鶴女の美しさは、還暦をすぎた老女ということばには、どうしてもしっくりしない。この人が、若い日、ひさし髪に結って、加賀友禅の長い袂の着物を着、憧れの女流作家田村俊子に逢う瞬間を想像して胸をときめかせ、汽車に揺られている姿は、どんなに華やかに美しかっただろうと想像される。

私は、茶号を宗雲と称える山原鶴先生の、いちばん新米の弟子だけれど、茶道は一向に上達しそうもない。それでも月に三、四回、松寿庵を訪ねることは、この春以来、私の埃っぽい生活の中で、何よりも清潔で心の洗われる時間になっていた。稽古日以外にも、私は、この古びた静かな邸を訪ねることが多くなった。いつでもおだやかな微笑と、人を包みこむような優しさで迎えてくれる人の雰囲気が懐しいことと、興がつのれば、何時間でも、時間を忘れ、話してくれる田村俊子を中心にした思い出話の面白さ、意外さ、華やかさ、淋しさに、魅惑されてしまうからであった。

「俊子という人は、相手に応じて、一人一人に違ったつきあい方の出来る人でした。たとえば、わたくしのことなどは、いくつになっても、若いころ、金沢の町から熱心な手紙をよこしていた娘という印象がぬけないらしく、死ぬまで、わたくしを世の中の汚れなど一切知らない、清純無垢な女と決め込んでいました。世間に伝えられている、あの

人の奔放な愛欲面などは、みじんもわたくしにはのぞかせなかったし、話題にもしなかったものですよ。あの人の中の美しい純粋な面だけをわたくしには示してくれました。だからわたくしは、あの人の小説の愛読者だし、世間の評判も人並に聞いて知っているのだけれど、思い出の中に出てくるあの人は、わたくしには、やさしい、なつかしい純粋な人なんです。わたくしがあの人の文学を好いていることに対して、わたくしの夢をこわすのがまるで罪悪のように思うのか、わたくしに逢った時は、いつでも、小説を書く話をするのです。晩年書けなくなってしまった頃——支那からよこす手紙にでも、今月はうんと書きたいとか、今年こそはいいものを書きたいとか、きまって書きそえてありました。

わたくしは、あの人のアメリカへ発つ直前数度逢ったばかりで、十八年後アメリカから帰って北京へ渡るまで三年余りの短い年月のつきあいでした。一読者として近づいただけで、師弟という間柄でもなければ、ましてあの人の作品によく書かれている同性愛的なものでもありません。親しいといっても限度がありますけれど、帰国後、北京へ渡るまでのあの人にとっては、いちばん交渉の多かった人間かもしれません。孤独であったあの人が、やはり孤独であったわたくしをなつかしがり、十いくつも年下のわたくしを妹のようにたよりにしていたことはたしかです。そういう意味で、他の人には想像も出来ないさびしい俊子さんというものを、わたくしはいちばん知っているような気もするのですよ。

はじめて逢ったころのことですか。

さあ、あれは、わたくしが目白の女子大に入った年ですから、たしか大正七年のことです。それまで、わたくしは郷里の金沢市に住んでおりました。父が市長をしておりましたが、わたくしの幼い時、母がなくなっていましたので、女学校を出た後のわたくしは、家の中では主婦代りになり、奥うちを取りしきっていました。女学校の頃からいわゆる文学少女で、『女学界』や、『女子文壇』等に詩や小文を投書していたりしたわたくしは、東京へ遊学することに憧れていたのですが、ひとりっ子のわたくしは、父が一人になるのはさびしいだろうと思い内心あきらめていたのです。

それが女学校を出て六年目に、どう思ったのか、父が東京へ出て勉強してもいいといい出してくれました。おくればせの願書を出してみると入学許可が来たので、夢のような気持で、急に上京しました。

その車中でも、わたくしは学校に入るということよりも、上京して、日ごろ憧れていた田村俊子に逢えるという喜びでいっぱいだったのです。

俊子さんはその年から七年前、明治四十四年に、大阪朝日新聞の懸賞に長篇『あきらめ』が一等当選して、文壇にデビューし、ずっと流行作家として活躍していました。人気のすばらしさは、このごろのように、女流作家の多い時代では、とても想像もつかないものでした。

わたくしも、『あきらめ』以来、絶対的なファンになっていたのです。

手紙も出し、美しい字のやさしい文面の返事をもらって、わくわく喜んでいたものです。母のないわたくしはさびしがりやでした。年上の才気にあふれた美しい芸術家に、母の俤を描いたところもあるのでしょう。

ところが、その年に入って出したわたくしの手紙には、俊子さんから返事がぱったり来なくなり、おしまいには、これまでどおり谷中に出した手紙が返って来るようになったのです。

文壇ではようやく田村俊子の行方不明が伝えられはじめていました。一年ばかり前から創作に行きづまっていた俊子さんが、鈴木悦との恋愛問題もからみ、田村松魚の家から出て、行方をくらませていたのです。

そんなことのわからないわたくしは、田舎者ののんきさで、東京にさえいけば、田村俊子の行方はきっと自分の手で探し出してみせるくらいの意気ごみだったから、笑ってしまいます。

上京してみますと、六年も学業から遠ざかっていた身が、六つも年下の少女たちと、起居を共にし、机を並べるのですから、その苦労は想像以上のものでした。六年のブランクを埋めるのに追われつづけ、二か月ばかりは、寮と教室を往復するだけで、夢中のうちにすぎてしまいました。

あわただしく春が逝ってしまうと、急にわたくしは俊子さんのことを思い出し、その行方をたずねることを思い出しました。すると、芝の玄文社という出版社で、俊子人形を売り出しているという広告を何かで見たのです。わたくしは躍り上りそうになり、早速、芝へ、その社を訪ねていきました。何しろ、上京して二か月目、しかもその間寮と学校の間しか往復しなかった田舎者が、急に市中へ出たのですから、たまったものではありません。目白から芝へ出るだけだって大事業なのに、芝で社名だけを頼りに探すのです。知らない町並で迷う間に、陽がみるみる落ちていく時の心細さと、半日がかりでようやく玄文社を見つけた時の嬉しさは今でもありありと覚えているくらいです。

たしかそこには、千代紙で作った人形がたくさん並んでいました。潮汲みとか、藤娘とか、数種類の人形があって、どれも一つが五円でした。当時のお金で、五円の人形の値というのは、法外に高いものです。でもそれを、喜んで買

っていく俊子ファンが相当いたのでしょう。

係りの人は、また俊子ファンが来たという顔付でわたくしを迎え、

『潮汲みですか？　藤娘ですか？』

『あのう、わたくしは、実は人形を買いに来たわけじゃあないのです。もちろん、人形も買いますけど、これをつくっている田村俊子さんの住所を教えていただきたいのですけれど』

『ああ、それはだめなんですよ。絶対だめなんです。本人から固く申し渡されているんです。あなたのようにいってこられる人は日に何人もあるんですよ。でも絶対教えちゃいけないんです。そういう約束なんですから』

まるでとりあってくれません。

『それじゃあ、しかたありませんけど、この人形を田村さんの所から持ってくる人がいるわけでしょう？　この名刺を、その使いの人に必ず渡して下さい』

わたくしは、名刺の裏に、上京したこと、やっとここをたずねあてたこと、逢うのがいやなら、せめて、居所だけ知らせてほしいと書き、置いて来ました。その名刺も渡してくれたものやら俊子さんからは、やはり音沙汰なしでした。

そんなある日、わたくしは所用で市電に乗りました。ふと、何気なく隣の人のひろげている、読売新聞の文字が目に入ったのです。

『紙人形……岡田八千代』

岡田八千代さんと俊子さんの親交は、雑誌でよく読んでいましたから、その随筆の題が、行方不明の田村俊子に関するものだと直感しました。わたくしは、もどかしさのあまり、目的地へ着くのが待ちきれず、次の停留所で電車を飛び下りると、すぐ停留所前で読売を一部買ったのです。わたくしは息もつかず、一気に『紙人形』を読みました。

その内容は、ある梅雨模様の日、玄関に訪う声がするので出てみると、思いがけず、田村俊子の家にいた女中のいさちゃんという少女が立っていた。彼女はふろしきづつみの中から、千代紙人形をいくつかとり出し、先生がおつくりになったものですが、お金に困っているので、ぜひお買いあげ下さいという。八千代さんは驚いて、どこにいる、どうしていると問いかけたが、先生に一切口どめされているので申しあげられませんと、いさちゃんはさしうつむくばかりであった。あんなに親しくしていたのに、だまって身を隠すなんてあんまりだと、俊子さんにいうぐちをいさちゃんに向っていいながら、なけなしのお金をかきあつめ、とにかくその紙人形をぜんぶひきとってやった。帰っていくいさちゃんの後を見送り、思わず表まで出てみると、少女は、たれこめた梅雨空の下を、渋谷青山方面に向って、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com